

< 2015年11月 >

手帳と日記のいろんな悩み

国保連合会嘱託 東田 文男



今年も新しい年の手帳を買い求めた。スケジュールがそれほどあるわけでもないのに、定年後からは3年連用の手帳を使用している。一日のスペースは「横4㌘、縦3・5㌘」である▼真新しい手帳を前に毎回悩むことがある。手帳に名前や住所などを書くか、どうかだ。手帳を一度落としたことがある。名前と勤務先の電話番号を記載していたので手元に戻ってきたもの

の、知人の個人情報を読らしてしまったような気分になった▼日記は5年前から大学ノートにつけている。身辺雑記が中心だが時には告白めいたことを書くことも少なくない。とはいえ、そう素直に本音は書けない。こちらは、誰かに見られたらという心

配がつきまとう▼見られて一番困る「誰か」とは、長く連れ添っている「あの人」だろう。そして、その人を日記に書く時、どう表現するかという悩みもある。妻、女房、家内、連れ合い、それとも名前に敬称をつける?▼さらに悩ましい問題がある。たまった手帳や日記を将来どうするかである。死後、読まれることをよしとして残すのか、

生前中に何らかの形で始末するかの選択を迫られる。スマホを利用したら問題の多くは解決するとの声も聞こえる▼古い奴だとは思いますが、それこそ長年の連れ合いである。そんな簡単には別れられない。いろんな悩みがあるとはいえ、まっさらな紙の上に、心機一転、1年を新たにスタートできるあの感覚は何物にも代えがたい。買ったばかりの2016年の手帳に早速書き込んだのは病院の予約だったが…。

